



TOKYO FULBRIGHT ASSOCIATION
東京フルブライト・アソシエーション

NEWSLETTER

No.22
December
2009



総会



第34回日米交流チャリティ・ゴルフ大会



CONTENTS

ページ

表紙	ジョン V. ルース駐日アメリカ大使	
前グラビア	総会とチャリティー・ゴルフ大会	
ルース大使からのメッセージ		2
カロライン・又野・ヤンさんからの叙勲御礼		3
同窓会メンバーから	江端貴子 文野千年男 古谷善平 比嘉幹郎 我謝京子	4
2009年度総会報告	①講演会 原文人 ②長坂健二郎会長挨拶 ③決算・会務報告	8
アンケート特集	若手フルブライター体験者は何を考えているか?	12
三上基金と三上フォーラムについての報告	大野 熙	16
2009年度財団奨学生冠名リスト		19
ガリオア・フルブライト同窓会の活動	中部同窓会 四国同窓会	20
第34回日米交流チャリティー・ゴルフ大会	外池滋生	22
2009年度アメリカン・ニューグランティー歓迎会		23
鎌倉歴史散策ツアー	松尾秀助	24
国会・最高裁見学ツアー	島田道子	26
宇都宮・日光ツアー	山田真之	26
セミナー報告	定森大治 中尾武彦 千野境子 泉 宏	28
東京フルブライト・アソシエーション沿革とホストファミリー		31
世界フルブライト・アソシエーション第32回年次総会 (ワシントン DC)	大野 熙 福田 学	32
掲示板	藪根正巳 今井章子 佐久間徹 米原あき	34
事務局から	新しいサロンへの招待	36
後グラビア	アメリカン・ニュー・グランティー歓迎会	

Photo: Hirokazu Takayama

ルース大使からのメッセージ



AMBASSADOR OF
THE UNITED STATES OF AMERICA
TOKYO


Message
Fulbright Alumni Association Newsletter
October 26, 2009

It is my pleasure to congratulate you on being alumni of the Fulbright scholarship program, the premier exchange program of the U.S. Government.

Until I arrived in Japan, I had no idea that one of the titles I would assume as Ambassador was that of honorary chair of the bi-national Fulbright Commission. This is a position I accept with enthusiasm, because as each of you has no doubt personally witnessed, the results the Fulbright experience produces in terms of building relationships and fostering mutual understanding are without peer. For over 50 years, the Japan-U.S. Fulbright Program has helped men and women prepare for careers, enriched the lives of thousands of individual participants, and played an indispensable role in linking our societies and nations together in partnership.

Nowhere in the world has that bilateral Fulbright effort been more successful than in Japan, where a nationwide network of Fulbright alumni associations play a crucial role in keeping the Fulbright experience alive by encouraging interactions with other alumni, new program participants, and the U.S. government. I commend you on the successful completion of the Annual Fulbright Alumni Charity Golf Tournament and your annual fundraising efforts that provide important financial resources to the Japan-U.S. Educational Commission as it expands the Fulbright experience to the next generation of global leaders. I encourage you to engage with this new generation of Fulbright alumni through your traditional alumni activities, as well as through new technologies such as the *State Alumni* online community, to ensure that the U.S.-Japan relationship continues to strengthen in the future.

You have my deep gratitude for your important contributions to the Fulbright Program as a member of the esteemed Fulbright alumni community.


John V. Roos
Ambassador

カロライン・又野・ヤンさん叙勲

われらが親愛なるヤンさんが、平成21年の「秋の叙勲」で旭日中綬章を受章されました。ヤンさんからのメッセージがとどきました。

私が、この秋の叙勲で旭日中綬章をいただけたのは、フルブライト同窓生の皆様のお陰です。1982年（フルブライト・プログラム30周年）から同窓会を設立し、全国の同窓生による募金活動がはじまりました。その活動の一つとして始めた、フルブライト・チャリティーゴルフ大会も、この年から数えて今年が28年目になり、まだまだ続けられることでしょう。

また、1986年にはフルブライト記念財団も設立されましたが、この様な活動のお陰で日本のフルブライト・プログラムが発展してきましたが、これは同窓生の皆さんのご協力、そして今は亡き山内大介さん、小山八郎さんとそれに川村茂邦さんのリーダーシップがなければ、このような勲章はいただけなかったと心から思っています。

皆さん、本当にありがとうございました。そして、これからもフルブライト・プログラムの発展にご協力下さい！



Caroline A. Matano-Yang

ハワイ・オアフ島生まれ。Smith College 卒業。Michigan State U. Educational Administration の修士。1972年5月から1994年3月まで22年間にわたって日米教育委員会事務局長をつとめ、フルブライト・プログラムの「顔」として内外の関係者に親しまれた。

同窓会メンバーから

政治が変わった夜



江端 貴子
1990 M.I.T.

衆議院議員、民主党。
外資系企業取締役、東京大学
准教授などを歴任。今年の総
選挙で東京都第10区から立候
補、見事、初当選を果たした。

8月29日土曜日夜7時半、池袋西口公園前につけた街宣車に登った私は、息を飲んだ。

西口公園の噴水を丸く残して、公園も、バス停を隔てた通りも、そのまた向こうの通りも、人で埋め尽くされ、またその方たちが、首から上しか見えないほど、立錐の余地もない状態でこちらを見上げている。第45回衆議院議員総選挙の最終日に民主党の鳩山代表の最終演説を聞こうと集まったおよそ1万人の方たちであった。池袋東口で麻生総理、西口で鳩山代表という最高のお膳立てで、私の最終演説を行う。これは新人にとって、本当にかげがえのない人生で最初にして最後の晴れ舞台であった。まさに革命前夜とでもいうような、熱いうねりを受け止めさせていただいた。

このように盛り上がった選挙であったが、最初から順調だったわけではない。私が最初に政治家を目指したきっかけは親の介護であった。当時母親の援助も受けながら、子育てと仕事を両立させていた私は、突然頼りにしていた母親が今度は介護が必要になるという状況に直面した。介護事業所に相談したところ、私が同居しているために、生活支援、つまり買い物や炊事、洗濯、掃除などの援助は受けられないという。私は働いていて、昼間はいないのですがと言っても、同居人が働いているか否かは関係ないとのこと。男女共同参画や女性の社会進出を進める中、ずいぶん後ろ向きの制度だと感じたが、ちょうど学童保育が終わりになる息子のこともあり、当時外資系企業の日本法人の取締役であったが、職を

辞し、介護と子育てのために家庭に入ることになった。これからますます、非婚化、核家族化、少子化が進む中で、介護制度がこのような状態でいいのだろうか、もっと生活者の視点から制度を変えていきたい。その思いが政治家になる原動力となったのである。

その志のもと、円より子参議院議員が校長を務める「女性のための政治スクール」にて勉強をさせていただき、4年たって、2007年12月18日に東京都第10区の民主党公認候補として、当時の小沢代表と一緒に記者会見を開いた。小沢流選挙といえば、3万軒は歩け、1日50回は立立ちを行うようにと言われる。選挙区において、まさに地盤、看板、かばんのなかった私は、ポスター張りや立立ちに明け暮れた。立立ちは、1箇所5分ほど話し、また数百メートル離れたところで話し、を繰り返す。1時間で10箇所、6時間で60箇所、ほとんど人通りのない昼下がりの住宅街での立立ちは、本当に聞いている人がいるのだろうか、これが選挙に役立つのだろうかという不安だけが残った。

時々、雑誌や新聞が行う世論調査でも、まったく認知度や、支持率が上がってこない。少しめげそうになっていたある日、いつものように立立ちをしていたら、ちょうど目の前の家から、60歳くらいの男性が出てこられた。家にいたら、外で「介護」という言葉が聞こえたので、出てきたという。その方はお母様と二人暮らしで、8年前から会社を辞め、お母様の介護をされている。炊事、洗濯、家のことやお母様の身の回りのことをするためにずっとやってきた。しかし、もう限界です。この先何年続くかと思うとつらいと話されました。私はその話を伺って、ああ私の話でも聞いてくれている人がいる、この方のためにも、介護制度を何とかしなくてはいけないという大きな勇気をいただいたのである。

一方で、2008年の年明けにはとされていた解散は、次年度の予算が成立してから、洞爺湖サミット

が終わってから、北京オリンピックが終わってからの、どんどん先送りされ、一時は、日程まで報道された10月、11月の解散も100年に一度の金融危機という理由で、流れた。こうした中、地域の皆さんの政治を変えてほしい、私たちの生活を変えてほしいという思いは、むしろ大きくなっていったのである。2009年になって、定額給付金や補正予算の内容などで、皆さんの不満、不安は一気に高まった。迎えた7月の東京都議会議員選挙では、私の選挙区である豊島区で、民主党の都議会議員が4万5000票以上を獲得して、2位以下に2万票以上の差をつけてトップ当選し、もうひとつの行政区である練馬区では、定数6名のところ、3名の民主党の都議会議員が誕生するという快挙を成し遂げたのである。

8月30日の投開票日、当確が出るまで、支援者の方々をやりもきさせたが、東京都第10区で民主党初の小選挙区での議席をいただいた。しかし、これからは本当の意味での奮闘である。選挙において、大きな勢いをいただいたが、それは民主党に対する全幅の信頼ではない。まさにこれから、人を重視した、人を守り、人を育て、人を活かしていく制度づくり、予算配分をどう実現していくかが問われている。私が掲げている3本の柱の政策、1) 介護する人を助けます、2) 教育する人を育てます、3) 働く人を増やします、今までのムダな道路やハコモノや、必要のない公共事業を止めて、人にお金を投入していかない限り、実現は難しい。そしてその判断の根幹は、「生活が第一」ということである。まずは、生活の足元を固めて、お互いが支えあい、助け合う社会を築いていきたい。そのことが消費を促し、内需を高め、社会や国の活性につながると思うからである。

朝の5:30に起きて、息子のお弁当を作り、今も地下鉄で永田町に通う私にとって、日々の行動は、ほとんど変化がない。ありがたいことに、顔を覚えていただき、街角や電車内で、声をかけていただくことは多くなった。私にとって、皆さんとの意見交換、交流の場は、なくてはならないものである。地元の活動も行いながら、初心を忘れず、また生活実感を失わず、これからの大きな政治の変革に取り組んでいきたいと思う。

思えば、私のキャリアの挑戦は、フルブライターとして、米国に留学したことからは始まった。今回の当選にあたっては、米国大使館より、私と米国の関

係をまさに作ったのはフルブライト奨学金制度であることを誇りに思っていたきたいという、温かいメッセージをいただいた。これからもフルブライトの一員として、志高く、がんばっていきたい。

フルブライト留学と コロンビア大学

文野 千年男
1968 Columbia U.

三井業際ヒューマンアセット株式会社 代表取締役社長

私は1968年9月からフルブライターとして約1年間、コロンビア大学（経済学大学院）へ留学させていただいた（1969年12月のMA）。留学の一環で直前の2カ月はデンバー郊外ボルダーの町に位置するコロラド大学キャンパス内にあったエコノミクス・インスティテュートで短期のトレーニングを受けた。その時は現フルブライト記念財団理事長（元50周年記念行事実行委員長）の賀来景英氏とシアトルに向かうノースウエスト航空から一緒に2カ月間寝食をともにした（同氏は直後にシカゴ大学へ留学）。

帰国後、フルブライト同窓会活動では40周年（1992年）、50周年（2002年）の記念行事のお手伝いをはじめ日常の活動にも積極的に参加させていただいてきた。50周年記念行事では私もスペシャルアクティビティーズサブコミティーのチェアとして参画、同行事の締めくくりとしてフルブライト留学生OB並びにその家族など総勢50名の参加を得て「REDISCOVERING AMERICA TOUR」を実施、フルブライト夫人にも参加いただいてボストン、ニューヨーク、ワシントンなどで交流行事が行われ、ニューヨークではコロンビア大学側にホスト役をお願いし有意義な行事が行われた。フルブライト氏の出身地であるアーカンソー州のファイアットヴィルを訪ね、同氏が38歳で学長を務めたアーカンソー大学や同氏ゆかりの記念碑・図書館・墓地まで訪ねる機会を得て同氏への感謝と同氏の偉業を偲ぶ大変有益な旅となった。

さて、わが母校コロンビア大学にはフルブライト留学制度発足以来これまでのべで319名（同窓会事務局調べ、帰国ベース）が留学している。因みに最初のフルブライターとしてコロンビア大学に留学された市村真一氏（元京都大学経済学部教授）は経済学大学院に留学されていた。現在フルブライト同窓会会長の長坂健二郎氏も1962年のコロンビア大学

留学生である。

日本からのフルブライト留学生総数は現在6904名であり、319名のコロンビア大学への留学生の比率は全体の5%弱、フルブライト留学制度発足以来、毎年平均では5人強がコロンビア大学へ留学していることになり、フルブライトOBの数では米国の大学の中でも有数の大勢力になるかと思われる。

私は現在、会員1000人を超えるコロンビア大学日本同窓会の会長をおおせつかつているが、企業派遣その他一般留学生合算では、コロンビア大学への実際の留学生は2000人を超えられ、日本同窓会としては会員増強活動は不断の重要課題である。コロンビア大学へのフルブライト留学生でもわが日本同窓会に入会されている方はまだほんの一部に過ぎず、若い方々をはじめ未入会の方はぜひコロンビア大学日本同窓会のホームページを通じて入会をお願いしたいと思っている。(年会費不要、入会金5000円のみ)

コロンビア大学日本同窓会では会員向けの主要な活動として、年一回の総会、定期的なレクチャーミーティング、大学関係者の訪日に伴う接遇や会食、大学側の行事への参画と協力、同窓生が関係する施設などの見学会・アウトイングなどを開催、コロンビア大学と会員間の継続的関係の促進、かつ会員相互の親睦と理解を深めることを目的として熱心に活動している。最近では2004年4月にコロンビア大学創立250周年を記念し、コロンビア大学のボリンジャー総長をお迎えしてパレスホテルにて500人近い卒業生等が集い、式典を開催したのが印象深い大行事である。

この7月1日には、同窓会のレクチャーミーティングに国連UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)協会の事務局長である根本かおる氏(1994年コロンビア大学フルブライト)を講師に迎え、「国連難民援助活動に参画して」をテーマに講演をお願いし、多くの女性卒業生の参加も得て大変好評であった。

フルブライトとしてコロンビア大学を卒業させてもらって以来、はや40年、今も母校コロンビア大学への強い愛校心とフルブライト留学生としての強い誇りを持ち続け、両方の活動にはこれからも積極的に参加していきたいと思っている一人である。



今年7月、根本かおる氏の講演会後、同窓会旗を囲んで同窓生仲間と記念撮影。中央背広姿が文野氏。

「ある日の村野藤吾 —建築家の日記と知人への手紙—

古谷 善平

1959 Illinois Institute of Technology

Ontario Association of Architects

フルブライト留学の縁で、海外生活を始め、もう半世紀になりました。その間多くの人との出会いと別れがありました。その中で、最も感銘を受けたのが、建築家 故村野藤吾でした。

“一生の最後の日まで、鉛筆をはなさないでいたものだ”と念願しております”と言われた通りに、93歳で亡くなるその日まで生涯現役を貫き通した、その生き方は、人生観と芸術観そして、奉仕の心が深い確信に裏付けされたように、情熱に燃え立派な生涯を全うされました。

1984年に亡くなるまでの約20年間に戴いた70数通の書簡の中から、遺族と相談して、公開し、「ある日の村野藤吾—建築家の日記と知人への手紙」という本になり、2008年9月に、六耀社から出版されました。(注：知人への手紙というのは全て私宛のものです)(東京、六耀社、2008.191pp)

「ガリオア留学生の足跡」



ガリオア・フルブライト沖縄同窓会の比嘉幹郎氏(1954 U.C.Berkeley)が編集代表となり、55名の同窓生から集まったエッセイを1冊の本にまとめ、2008年に出版した。

戦後、米軍占領下にあった沖縄では、いわゆるガリオア(Government and Relief in Occupied Areas) 占領地域の統治と救済) 資金でアメリカへ留学生を送る制度が1972年の日本への返還まであった。返還後はフルブライト・プログラムに引き継がれたが、この本は「ガリオア留学生」55人が自らの留学体験を綴ったエッセイ集だ。

2008年時点で日本本土からガリオア・フルブライト資金で渡米したのは7200人余だが、沖縄からガリオア資金で留学した人数は複数回の場合も入れる

と1045人もいる。それだけ沖縄人の教育熱は高かったし、夢と希望を抱いて豊かなアメリカに渡った若者たちが多かったことを示している。

1949年の第一期生、伊江朝章氏は軍用機で沖縄から東京(立川)へ、さらに基地の島を経由して西海岸にたどり着いた。この年は2名のみ。伊江氏は鉄道でオハイオ州ウィッテンバーグ大学に留学し2年間を過ごした。帰国後は琉球大学教授として後進を育てた。責任編集者の比嘉幹郎氏は2期目の1950年に軍の輸送船で太平洋を渡った。1年間のニューメキシコ大学留学を終え、UCLA、UCバークレーと転校しつつ、日本人庭師のヘルパーやイチゴ摘み、ブドウ摘み、家事手伝いなどのアルバイトをしながら4年間のアメリカ生活を体験。後に沖縄県副知事なども歴任した。そして最後の年、1970年の留学生となった澤田清氏(ハワイ大学大学院)は、帰国後、国際ビジネスで活躍。澤田英語学院を設立して英語教育に貢献した。

さらに比嘉氏が尽力して「沖縄科学技術大学院大学学園法」が国会で成立、沖縄科学技術大学院大学(OIST)が2012年に恩納村に開学することになった。国が経費全額を援助しつつも、自由な学園運営が可能な「特別な学校法人」として、神経科学、数学・計算科学、サンゴなど海洋生物の研究を含む環境科学などをテーマにして世界最高レベルの教育研究機関となる。

インタビュー

我謝 京子さん(1991 U. of Michigan)

映画「母の道、娘の選択」を監督して

(インタビュー 今井 章子)

「フルブライトは、私にとって人間になるためのプログラムだったんですよ」——この言葉の意味するところは、我謝京子さんが自ら出演・監督し、このほど東京国際女性映画祭の招へい作品となった映画「母の道、娘の選択」に詳しい。

この映画は、ニューヨークに住む日本女性たちが「日本を出た理由」や「罪悪感」、「日米の働き方の違い」「子育てと仕事との両立」を語る中で、その母親世代の思いをも描いたもので、我謝さん自身とその母の半生を軸に展開する。

我謝さんは雇用均等法施行後まもない1987年放送記者になり、結婚後、フルブライトのジャーナリスト・プログラムでミシガン大学へ留学した。それまですべてが仕事中心だった我謝さんは、そこでは

じめて「自分の身体の声に気づいた」という。そして卵巣摘出手術。だが今度は術後の服薬の副作用に悩まされ、医師からの「健康になるための選択肢」との助言もあって29歳で出産。フルブライトで「人生を考え直し、日米の文化に加えて母としての文化が自分の中に生まれた」と語る。

帰国した我謝さんは、阪神大震災やペルーの日本大使公邸人質事件など、再び取材で世界を飛び回る生活に。夫も同業だったことから、家族ぐるみで実家に頼る「パラサイトカップル」状態だった。プロとしては充実していたが「日常を伝えるのが記者なのに非日常的な暮らし方をしていてよいのだろうか」と悩み、別の部署へ異動。ところが張り合いを失ってしまい「今度は自分が壊れた」。2001年、ライター・経済記者として渡米した直後、今度は9・11に遭遇する。ワールドトレードセンターの真下の小学校にいる娘を気遣いながら日本へ中継するという体験もした。

「NYでは自称映画監督というのが本当に多いです。作品になるのは奇跡に近い」と我謝さん。そんな中で「母の道、娘の選択」はどうやって完成したのだろうか。「不思議な縁です」。取材を進めるうちにストーリーが続々と集まり、自作の試写会で編集の榎田尚代氏と出会う。そして2人、集まった膨大な量のテープを前に、2年間かけて粘り強く編集を続けた。「投げ出さず、あきらめずに走り続けたこと」が完成につながったと振り返る。

「この映画は成功例を集めたものではありません。人生にはいろいろな選択肢があること、その多様性を描きたかった。見た人が自分のことを重ね合わせることができる、連帯感のある映画になれば」と我謝さん。そして、5年かけてようやく出来上がった映画を一人でも多くの人に観ていただけたらと現在、世界中の映画祭にエントリーすると同時に、公開にむけて配給先を探している。映画完成の今、日本そして世界公開という、新たな挑戦に向けて、我謝さんは再び走り始めていた。



我謝京子さん